

貴志康一歌曲 歌詞

参照：貴志康一作品集（貴志康一刊行委員会）

（みやび）

1. 風雅小唄 詩：貴志 康一

あやに麗し美の女神 見れば思いもます鏡
映す姿に焦れ寄る 風雅男の群れこそは
ホンニうれしい風雅の集い

京の寺々花の春 奈良や龍田の宮の秋
思ふ夢殿三輪の山 上る旅路も趣味の友
ホンニ楽しい風雅の集い

白酒黒酒（注1）の昔より

薫りゆかしきみかのほら
湧きて流るる泉かや
風情つきせぬ酒の友
ホンニ楽しい風雅の集い

2. 赤いかんざし 詩：貴志 康一

赤いかんざし何でものいわぬ
あたいがこんなに思てることを
せめてお前が言わしゃんせ
あかいかんざしなみだにぬれて
なんでそんなになしそう
天神祭りのかがり火を
お前はちゃんとわすれたか
初めておうたあの人に
やさしい声をかけられて
ふとしたおもいが恋になり
わすれよとても恋ゆえに
おもい詰めたこのあたい
誰がこの恋するものか
あかいかんざし何でものいわぬ
あたいがこんなに思てることを
せめてお前がいわしゃんせ

3. 行脚僧 詩：貴志 康一

あきのやまじをただひとり
あさつゆしめるくさわけて
さとからさとへつえすがり
ねんぶつとなえさすらいつ
なむあみだぶつ なむあみだムー ムー
なむあみだぶつ なむあみだムー ムー

ふゆのさむぞらただひとり
ゆきのころもでしのぎつつ
のきからのきへかねならし
ねんぶつとなへさすらいつ ムー

4. 藝者 詩：貴志 康一

紅おしろいの 色あざやかに
藝者の足どり よっこらどっこい よっこらさ
ちりちんちん ちんちりりん
ちりちんちん ちんちりりん
揺れるかんざし あでやかに

藤色の 絞りの布を 肩にかけて
よっこらどっこい よっこらさ
とんとんのとことん とんとんのとことん
手とり足とり おもしろや
よいこら よっこらどっこいしょ
祇園藝者の格好

酒飲め飲めよ 飲み明かせ
よいこらどっこいさっさ

よいこら よいこらどっこいしょ
祇園藝者の格好

踊ろよ踊れ 踊りぬけ
よいこらどっこい よいさ

5. 大島おけさ 詩：西條 八十

色も香も おぼこそだちの島椿、
無理に咲かせて ららららんららん

後でなかせるたびの空（注3）

御神火の 燃えて身をやく島そだち、
父が言たとて らららんらんらん
忍ぶ恋路が止めりやりよか

仇し浪、寄せて返して日が暮れて、
磯にゃ千鳥と らららんらんらん
泣いて船待つ島娘

6. 春の歌 詩：源 実朝
古寺の 朽木の梅も はるさめに
そぼちて花もほころびにけり（注2）

7. 花売娘 詩：貴志康一
花はいらぬか菊の花
朝つゆ薫る菊の花
花はいらぬかおみなえし（注4）
月影映るおみなえし
わたしゃ田舎の花売りよ
花を売りつつ歌唄い
ららら……
花はいらぬか秋の草花
ききょうかるかや（注5）すすきはぎ草
きれいな草花よ
花はいらぬか菊の花
朝つゆ薫る菊の花
花はいらぬかおみなえし
月影映るおみなえし

8. かごかき 詩：貴志康一
よいこらどっこいよっさっさ
ほいかごほいかごほいほいほい
かごはいらぬか
のりゃしゃんせ
なにははよいとこ
めいしょが多い

天満の天神天王寺

御陵に住吉大阪城

よいこらどっこいよっさっさ
ほいかごほいかごほいほいほい
かごはいらぬか
のりゃしゃんせ
天神祭りのお舟が通る
太鼓たたいて松明つけて
どんちきちきちき どんちきちん

よいこらどっこいよっさっさ
ほいかごほいかごほいほいほい
かごはいらぬか
のりゃしゃんせ
曾根崎新地の夕べの風情
三味や太鼓のはやしも陽気
とんとことことこ とんとことん

注1：白酒（しろき）黒酒（くろき）の起源は古代で、奈良時代（8世紀）に確立された大嘗祭や新嘗祭などの神事で神に供える特別な御酒のこと

注2：源実朝の『金槐和歌集』の一首。
大訳「古寺の朽ちた梅の木の花のつぼみが春雨によって開き始めている」

注3：西條八十の詩は、冒頭にハァーが入り、「旅の空」ではなく「旅の風」で、「らららんらんらん」の記載は無い。

注4：おみなえしのおみは「美しい女性」、えし（在す）は「圧倒する」の意味がある。

注5：かるかや：イネ科の多年草

豊田喜代美・記